

# 近松に描かれた恋愛

——心中物を主として——

熊谷 由美子

元祿時代は、我が国文学史上に於いて、平安時代と共に二大高峰とみられているが、後者が「貴族文学」と称せられているのもわかるように、支配階級の文学であつたのに対し、この時代に初めて「平民による、平民のための、平民の文学」がうちたてられたという点に、平安朝文学とは別の意味での価値が見出されるのである。このように文学が正常なあり方をとるようになったのは、一に町人階級の勃興によるものであつた。はじめ領主を中心とする割拠状態にあつた武士が、その権力の強大になるにつれて封建社会を確立し、国々に土着する農民を使役して農業経済で国を賄つていた保守的生活の時代には、被支配階級に知識の伸展がなく、批判精神の発達もない惰性的日常の繰返しが続いた。しかし商品が生れ商業経済を惹起する事により登場して来た商工階級

は同じ被治階級であつてもそれ迄の農民のように無智・無批判に甘んじては居られないという自覚を示した。平和がもたらす政治的安定のもとに、漸く活潑化した町人の動きは、その結果富を得し、社会における実質的地位も向上してくる。こうした町人のめざましい働きにより、近世初期はいきいきとした気分がみなぎつてきたのであつた。しかし時代の表面に立つて最も活躍したのは町人であつたが、そして彼等は農民のように厳しい掣に縛られる事はなかつたが、やはり封建制維持の為に支配階級が定めた掣の中を泳ぎ廻る自由しか与えられなかつた。のみならず階級としては、士農工商という序列の最下位におかれたのである。従つて町人は、商業経済の世を動かす最も実力のある者であり、またそれ故に最も多くの富を得ながら全力を正当に発揮するところを持たなかつたといえるのである。

近松の作品はこのような背景の上に書かれたものである事を念

頭に置き、またこれ迄多くの方が指摘されたように、淨瑠璃は純然たる科白劇ではなく勿論よみ物でもなく、作者が自由に筆を運び得ないものであつた事をも考慮に入れた上で、読み且つ批判すべきだと思ふのである。

ところで彼の作品中歌舞伎脚本を除いた淨瑠璃約百篇は、これ迄の慣例では、世話物二十四篇以外みな時代物といわれてきた。しかし實際作品にあたつてみた結果、両者の間に明確な一線を引く事が出来なかつたので、歴史上の人物名を借りながら、史実をうつしてない上に、空想的夢幻的なところもある時代物より、規模が小さく地味ではあるが、現実により得る事とみられ、内容が深刻で文学性の豊かな世話物の世界を、まず考察の対象としよう。それに世話物は興行価値も次第に高く認められていつたことが、文献により実証されるからには、猶更の事である。

近松といえはすぐ義理人情という言葉が思ひうかぶほど、その関係は密なるものというのがこれ迄の通説であつた。たしかに彼は義理人情の世界を描いており、時代物と世話物とはその取上げ方が全く同じとはいえないが、ともかくも義理人情の作家という事は肯かれる。そして近松自身の考えも文献により知る事ができるが、今日我々が義理人情という言葉からうける語感と元禄時代のそれとは必ずしも一致したものと思われぬ。そこで世話

物の殆んどに若い男女の恋愛が描かれている故、情感の解放されたこの時代の動きに即して居りながら、普遍的な問題でもある恋愛を、殊にそれらの大部分は悲劇的結末をとげているので、悲劇の中心をなす心中物を、主として義理と共にみて行きたいのであるが、紙数の関係上甚だ重要な問題である義理に関する詳細は、またの機会に譲る事にする。

なお近松の世話物を分類してみると、次のようになる。(高野正巳氏の「近松作品の分類法」国語と国文学昭和二十三年三月号による)

心中物……曾根崎心中・心中二枚絵草紙・卯月の紅葉・卯月の

潤色・心中重井筒・心中万年草・今宮心中・心中双は氷の湖日・生玉心中・心中天の網島・心中宵庚申

殺人物……女殺油地獄

姦通物……堀川波の鼓・大経師昔暦・鍵の権三重帷子

犯罪物……博多小女郎浪枕・冥途の飛脚・長町女腹切・丹波与

作待夜の小屋節

狂乱物……五十年忌歌念仏・寿の門松

傾城物……夕霧阿波鳴渡・淀鯉出世滝徳

右の表でもわかるように、心中物は世話物全部の約半数にあたる十一篇の多きに及んでいる。また遊女の登場するものは、

曾根崎心中・心中二枚絵草紙・心中重井筒・心中双は氷の朔日  
・生玉心中・心中天の網島・丹波与作待夜の小屋節・淀鯉出世  
滝徳・冥途の飛脚・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・寿の門松・博  
多小女郎浪枕

と十三篇もあり、前の六篇が心中物である事に注意される。このように遊女を描き心中を取上げたものが多いという事（それが意識的であつたか否かは今日から知る術もないが）、そこにこそ近松の本心がうかがわれるように思うのである。

## 二

今日義理人情と用いられる時、それは封建臭の強いもの、いわば一時代前のものとして多少侮蔑が籠められているように思われるが、近松の描いた世界もそのように軽んじられるものであつたであらうか。

当時の人情とは、人間性そのものでなく、人間性の中のきわめて脆弱で多感繊細な情の一面を指したものである。ところで今作品を世話物に限定したからには、彼自身それを主題にしているものの多い愛情の方面に、しかもその中で最も熱烈な恋愛に集中してみて行くわけであるが、この時代においては人生のあらゆる方面に手をのばす義理というものが厳として存したため、

恋愛といえども、否恋愛であればこそより多くそれと関わりあつた事であろう。近松がかような世界を捉えた事は、家永三郎氏「町人文芸にあらはれたる庶民の倫理」文学・昭和二十七年十月）が「封建秩序維持のための正統的な封建道徳は、支配階級である武士の守るべき規範たることはもちろん、被支配者階級に向つてもその遵守が要求せられ、庶民社会にあつても一応表面上これに随順すべきものとせられてはゐたが、もと／＼封建組織の維持を必ずしも必要としない町人階級にとつては、その様な道徳への随順は自発的に選んだ道ではなく、町人生活の現実からおのづと醸成される人倫觀念は支配者側から強制せられるそれと著しく異なる内容をもつてゐたから、町人の活きた倫理感情を体得した町人文芸の作者たちは、かれらが現実の把握に忠実であらうとする限り、支配者の人倫觀念と町人の人倫意識との矛盾を看過することはできなかった。かれらはこの二の道徳觀念の葛藤を好んで作中に描き出し……封建的要求に拘束されて不自然な教へを説く支配階級の道徳に対し、さうした拘束を必要としない町人の自由な立場から生ずる、人間自然の性情にのつとつた町人の人倫觀念の価値意識を擬してはげしい批判をあびせることをさへ敢てした……この態度は我が近松の淨瑠璃に於いて最も鮮明な形態をとつて表現されて居り、近松の追隨者

「たちにより、そのまゝの形で継受されて行つたのであつた。」と述べて居られる如く、作者としての良心に基き、時代の核心を衝いたものと思われるのである。

これ迄一般に近松が義理人情の衝突を描いた作者といわれて来たのは、それが近松文学の骨子をなすとするもので、世話物では人情を主人公の内部から発する人間的要求とし、義理はそれを拘束する封建的規範で、それらの相剋によりもたらされる苦惱や悲哀が、彼の愛に包まれ描き出されているとして理解されて来たように思われる。ところでそれは、事件の原因をその相剋にしているようにとれるのであるが、果してそれで正しいであらうか。

先ず「曾根崎心中」をみると、徳兵衛の死は主人であり叔父である人との間に生じた義理と、お初への愛情との板挟みになり進退きわまつた上での事ではなく、主人との関係は、徳兵衛の在所の継母に二貫目の銀を先渡ししてのつぎならぬ立場に置いた上で、己れの妻の姪との縁組を迫る主人に承諾の返事を与えないため二貫目の返金を要求されたもので、それを返さずすれば一応かたがつくという程度であつた。但し主人の言には、返金の外に大阪には置かぬとあり、これが問題になるかもしれないが、それはお初が「大坂を堰かれさんしても盗み家焼の身ではなし、どうしてなりとも置く分は私が心にある事なり」と言つてゐるので、

どの程度あてになるかは疑問としても、どうにかなりそうではあつたのである。つまり問題は義理と人情との衝突にあつたのではなく、銀が原因になつており、されば銀がすべてを解決する力をもつていたといえる。これを「心中大鑑」に載つてゐる実説といわれるものと比較してみると、大鑑では徳兵衛が主人の女房の姪と夫婦にさせられ江戸の支店にやられる事となり、お初も亦豊後の客に身請けされる話が進捗し、二人が別れなければならぬ破目に陥つた事が原因となつてゐるので、近松はお初の身請け話を削除し、あらたに九平次という敵役を創造している事が知られる。

しかし実説にみられる、恋をする者とそれを阻む者、すなわち人情と封建的拘束との関係は、世間に数多みられるところであつたろうし、生きて添われぬから心中するといふ点を強調する方が、当時としてもより自然であつたと思われるのである。しかし実際であつた為に、身近く実在する関係者への遠慮と、事実を知つてゐる人が相当存在する等故、あまりかけ離れた事を書かれもせずという観客への考慮とに苦心した拳句の事が、全く偶然登場する敵役に責任のすべてと、憎しみのすべてを負わせてゐるのである。つまりこの作品は、主要人物が二人共主人持で進退も儘ならぬ立場にあつた事に先づ気付かれ、そこに権力を主張し得る立場にある主人からの強制的縁談が持ち出され、それにも一応は反抗を

示すだけの気概がありながら、わが身のほどを弁えており、九平次にも友人としての義理立てをし、命代りの銀返貸してやる徳兵衛、かように封建的倫理を立派に体得していた彼と、相愛の仲のお初とが死なねばならなかつたのは、便宜的に登場する九平次に握られた銀の威力によるものであつた。なお生玉社頭で恥をかかされ、男を立てたい天満屋でさん／＼悪口を言われ、一分が立たなくなつたと思ひこむ性格もあづかつて力がある。この「一分が立たなくなる」とか「面目がつぶれる」とか思うのは、武士の名を惜しむ意識にも比せられるところで、敵役と結びつく事の多い銀の問題と男の一分を立てるという事とは、他の作に於いても重要な動機となつてゐるのである。また「心中重井筒」をみると、徳兵衛は妻子ある身でありながら、兄の経営する重井筒屋の抱え女郎お房と馴染んでゐるからには、二人の逢瀬のうまく行く筈がない。しかし難儀に陥つたのは女の方であつた。即ちお房の父が彼女を二重売二重判したもので、明日銀を渡さぬとそれが発覚し牢舎に入れられる故その銀を、と工面を依頼された徳兵衛は、一旦は女房の判を無断借用し都合したもの、女房の貞実さにくたれるとお房とは手を切ると返してしまふのであり、しかもそのすぐ後で目前に迫るお房の難儀を思い出しては狼狽するといふ、実に頼りない人物である。かような徳兵衛でも、銀が出来ぬ

からには死ぬ覚悟というお房に、いざとなると己が宗旨をかえて迄行を共にしたもので、敵役は登場しないがこれも情と義理との葛藤による心中ではない。また心中物に限らず、「冥途の飛脚」の封印切りや、「博多小女郎浪枕」の海賊の仲間入りも、みな遊女を思ひきれずさりとて養子とか親がかりの身で銀が自由にならぬところへ、他の客から身請け話が出て、それが早急に実行されそうな形勢に、僅かのきつかけから悪の道と知りつつ踏み入つてしまつたもので、これらにより主人公達の激しい情熱と、その反対方向に作用する銀の威力とを知るのである。

また他の作品においても、相愛の主人公達が何れも義理づくめの境遇にあり、当時に於ける恋愛への風当りは最も強かつたように想像されるからには、家族制度・身分制度等々の確立に伴い、その遵守を以て正道となしたこの時代にあつて、何かというと親権を發動する父母或いは養父母とか、それに準ずる伯(叔)父・伯(叔)母や兄弟等が、抗い難い力となつて主人公達に対決し、彼等はひたすら従うように要求されているのを見る。しかしこのように義理に絡まれた境遇におかれ、難題が持出され、進退きわまるなどという事は、当時においても特殊であつたと思われるのに、近松がこのような皆無とはいへぬまでも、不自然にみえる立場にある者を多くとりあげている理由の一つには、知識の低い観客に

感銘を与える為には最も手つとり早かつたことがある。すなわち難渋な境遇にあるという事は、一寸した契機で破綻に立ち至るので、淨瑠璃の伝統である憂いを催させるには適当なものであつたからであらう。こうしてこれら主人公達は、皆引返す事を知らぬ強烈な情熱の持主であると共に、義理を重んじ出来る事なら、また出来る限りはそれを立てようとする人物ばかりである。そういうところに義理に絡んだ金銭とか敵役とかが働くのであるから、悲劇となつたのも当然であり、このような結末をもたらす直接原因となつたそれらの力にも、一応注目する必要がある。先ず金力であるが、これは封建社会の後進的な拘束から人々を一時的に救つてくれたものの、結局庶民の武器とはなり得ず封建権力に妥協し寄生してしまい、それら商業資本は逆に人間性の解体に働きかけるものとさえなつてしまつたのである。丁度その制定当初は新しい人間性を創造する積極的な面をもつ前進的なモラルであつた義理が、次第に人々の拘束となつてしまつたように。そして又人を入とも思わないような敵役が大低金力を握つていますが、それは所詮封建組織を利用した悪の逞しさにすぎない。敵役とはつまり、主要人物をして悲劇の主人公たらしめるべく登場するもの故、それらが己れの悪意を強調する事により、普通なら世間から指弾される犯罪者等でさえ、対照的に善人の位置に迄推し

進められているのをみるのである。

ともあれこのように悲劇の主動機が単純で、義理と人情との真の対決は殆んどみられず（稀に、愛し合つてゐる夫婦が養母に離婚を強いられたところに事件の原因がある「心中宵庚申」のような作品もあるが）、結局は何ら必然性のない、全く偶発的もしくは作爲的な跡の歴然たるものとして、人情に働きかける外部的機縁により惹起されるので、悲劇が浅くなつてゐる。しかしそれにも拘らず近松の作品が、今日迄生命を保つてゐるのは何故であらうか。作品を通して彼が描き出そうと試み、事実描き出し得てゐるものは何であつたかを以下考えてみたい。

### 三

先にも述べたように彼の世話物は殆んど恋愛を描いてゐるが、それはこの時代の実情として勢力を得て来たものであつても、社会意識としては認められていないものであつた。しかし近松は、西鶴とは異つた観点から恋愛を肯定し、その種々相をうつしてゐるのである。

元禄時代の生活が、情の解放された反面において、深く根を張つた因襲的道德觀念の爲に、一般には男女の交際も自由でなかつた事は、諸種の記録に明かなところである。為政者・儒者等は「男

女の道は嗣を立つるのみ」という考えであり、それが社会を支配していたからには、自由恋愛など許される筈がない。しかし時代の趨勢に基く情感解放は、本能の支持をうけているもの故到底抑えられないのではなく、そこに公然と享楽の出来る世界——封建制度維持のために必要とされた道徳規範外の処——として登場したのが遊廓であつた。当時の社会において最も活気があり実力を有する町人が、その力を政治上社会上に正当に發揮し得なかつたからには、その吐け口として遊廓に奔る者が多かつたのも無理のない事である。一方遊里に勤めをする遊女は、在所に多くの係累をもつ貧困階級の出が多く「勤め大事に思ふ」のが商売冥利とされ、徹底した誠を以て生きる事を許されない、金がものという世界の籠の鳥であつた。従つて世間からは「もの」としかみられていなかったし、廓の掟に対し反逆を企てない限りは、人間性に反する生活をしなければならなかつた。こうして「傾城に誠なしと世の人の申」すような觀念も出来上つた事と思われる。ところが近松の世話物中の遊女をみると、皆誠実な心の持主として描かれている。客を欺くどころか、一人の男性に心底からうちこんで、遊女という身分を超えた、誠を捧げている事は随所に看取されるが、それが最もよく現れるのは恋愛の危機においてであつた。

「曾根崎心中」のお初は、九平次に「俺が懇してやらう、其方

も俺に惚れておやげな」といわれ、「こりやおからわいの、わしと懇さあんす」と此方も殺すが合点か、徳様に離れて片時も生きて居ようか、そこな九平次のどうすりめ」と、この時代の女性としては思い切つた言葉できつぱりはねつけている。これは九平次に欺かれ死を覚悟した後の事だからとしても、その前にも徳兵衛を思ふ真情は、言葉の端々にうかがわれるのであつて、生玉社頭の邂逅で男が音信をくれなかつたのを恨み、「ほんにまた余りな私はどうならうとも、聞きたうもないかいの、こな様それでも済もぞいの私は病になるわいの、嘘ならこれ此の害を見さんせ」と泣くのは、決して遊女が客に対する月並な手練手管ではなく、「ほんの女夫にかはらじな」と作者の諷刺に値する真実の籠つたものであつた。そうして悪賢い九平次を信頼したばかりに、理屈のみならず腕力でも敗れ去つた胸中斐ない徳兵衛に、愛想をつかさどころか、その為に一人心を傷め泣いている女性でもある。その終始一貫した純情可憐さは、一般家庭の娘と何ら異なるところがない。しかも賢明さ・強さを兼備している事が知られるからには、当時における近松の理想の女性であつたと思われる。またこれとよく似ている「生玉心中」のおさがは、「逢ひたい見たいはわしとてもほんにほんに寝た間にも忘れ」ず、「扇風呂のさがともいれた身が、晦日節季は前庭がけで、裏屋背戸屋際貧屋三界

かけ取にありく様な、勤するのも沢山に逢はうため」で、嘉平次について「わけの悪い評判きけば頭髪一筋づつ、抜かるゝよりも苦しうて、氣をもんでもがいても身は裸なり工面はならず……私ひとりなら死んで成りと了はうが、こなさん悪ういはずが口惜しい悲しい」とかこち、嘉平次を騙つた長作がいいよるのには、「いや／＼無礼過ぎた置かんせ……たとへ平様が盗人で有らうが強盗で有らうが、いとして／＼命をやつた此のさがぢや、なんぼこなたが仏程正直でも顔も見たうないわいの」「言ひにくけれど此のさがと、平様とは一心づくで逢うてゐる、こなたの様な口先ではないぞや」とはねつけ、また嘉平次が父親の膝詰め談判に屈し遂に口先だけ許嫁との縁組を承知した時には、「どこも首尾よう仕舞うておきは様と夫婦になり、親御の心を悦ばせて下さんせ、わし一人死ねば済む」と、わが身一つを捨て八方まるくおさめようという自己犠牲の態度をさへ示して「どの道からどういうても、只こなさんがいとしい」と己が真情を披露し、その切なさを訴えるのであつた。これらと異り敵役の登場しない場合でも、「心中重井筒」のお房は、明日に迫る銀の入用とその工面つかず一人死ぬ事に覚悟をきめたが、なお徳兵衛に「一目逢へばこれ本望末頼みない契りなれば、是限り／＼と逢ふ度毎の観念今更溜めていふ事な」く、男には貞淑な女房がある故に「貞女を立て

るお辰様の蔑みも恥かしい、仲ようして下さんせ」と言いながらも、「互に生れ代つたら本妻定めぬ其の先に早う女夫になりませう」と来世に望みをかけてゐるのであつた。また「心中双は水の明日」の小かんは、もと武士の娘だけに義理固く、叔母の貧窮を見かねて身を売つたところ、国許の親から迎えの使者が来たので、心を許し合つた平兵衛と別れねばならなくなり、困惑して「国へ帰つて親達の顔も見度うはござれども」男と別れる事は思いもよらず、どうしても帰れとあらば「私は見事に死にまする叔母様を頼みます、国へやらずに平様と永う添はせて下され」と親より男を大事に思う。しかもやはり親の事を忘れられず、思い余つて平兵衛に「是ではすはいふ時に国へ心引かされて、未練の出来まいものでもなし、こな様に逢ひ次第死んでのけうと覚悟をすゑ、剃刀は身を放さぬ」と打明けるほど、恋の為には他の一切を捨てて顧みないのであつた。以上は心中物における遊女の恋愛であるが、これらの例だけでも、すこしも遊女らしいところはなく、ひたすら己れの純情さを裏付ける言動を示すばかりである。このように深い愛情は、単にこれら下級遊女にとどまらず、色里の女王といわれた太夫にも亦みられるのであつて、「淀鯉出世庵徳」の吾妻が身請けされ勝三郎の許に忽ち途中、男の没落の悲報をきき、皆に廓へ戻れと勧められると「帰れば吾妻が首尾よ



いとはさうした吾妻ぢやないわいな、可愛い男の流浪したのを聞きながら、身の首尾を思ふやうな傾城ぢやと思ふて下んすは、曲がない情ないくつわの訳が立たぬとて、再び廊へ立帰り身の恥は扱置いて、勝二郎様の恥辱はこれが何と雪がれう」と言つて、男のためには二度の勤もすれば、進退きわまつては他の身請け客を手にかけてしまうほど、その情は正真なものであり、また「夕霧阿波鳴渡」の夕霧は、「私や煩うて疾うに死ぬる筈なれど今日迄命存らへたはま一度逢はせて下さるゝ、神仏の控へ綱これ懐しうはないかいの、顔が見たうは無いかいの」此の夕霧をまだ傾城と思ふてか、本の女夫子ぢやないかいの……誠をいはゞ今頃は一門中の状文にも、伊左衛門内よりと書いても人の咎めぬ事、私に恨みがあるならばこな様にも恨みがある。去年の暮から九一年二年越しに昔づれなく、それは幾瀬の物案じそれ故に此の病、瘦せ衰へが目に見えぬか、煎薬と練華と鍼と按摩で漸うと、命繋いでたまさかに逢うてこなさに甘ようと、思ふ所を逆様なこりや惨らしいどうぞいの、私が心変つたら踏んでばかり置かんすか叩いてばかり置かんすか、是死にかゝつて居る夕霧ぢや、笑ひ顔見せて下んせ拝んます」と、わざと素気なくしてみせる伊左衛門に切々たる情を訴え、煩うたのもたよりをもらわぬ故と、確信をもつて言いきれるほど打ちこんでいるのであつた。

作中人物の恋愛が、外部からの圧迫をうけるにまかせた消極的なものだけでなかつた事は、右の吾妻の外にも「博多小女郎浪枕」で知る事ができる。「恋しゆかしはいはいでも知れた二人が仲、此のお姿は親御様の御勘気でもうけての事か、様子がなうては叶はぬ筈、お前の心に此の小女郎はまだ傾城ぢやと思ふてか、此の身は廊に居るとても心は疾から女夫ぞや、肩裾結び手を引いて、人の戸口に縋るとも交はした詞違やせぬ」と小女郎が言つたのは、見すばらしい風体の惣七を、心から氣遣つての事。惣七が、海賊船に乗り合わせたばかりにこの有様というと、「よう打明けて下んした、實は薄物お命さへあるなれば、わしや嬉しうござんする、わたしが心でお前一人は如何なとなるおいとしや肌寒かろ、お顔がたと細つた」と言つた所には、心で思ふばかりでなく、実行にまでうつそうという積極的意気込みさえうかがわれるのである。また「冥途の飛脚」の梅川は、「忠様も世帯持……如何なる事が邪魔になり田舎の客に請けられては、我が身一つは死んでも退けう天神太夫の身でもなし」と言つてはいるが、忠兵衛の悪口をきくと「悲しいといとしいと身の果敢なさとかきまぜて、胸ひき裂ける忍び泣きア、刃物がな鉄でも、舌を切つても死に度い」と男の身になり共に悲しんで居り、封印を切つた忠兵衛に、「情なや忠兵衛様なせその様に逆上らんす、そもや廊へ来る

人のたとへ持丸長者でも金に詰るはある習ひ、此処の恥は恥ならず」と論ず分別は持つて居り、「私を人手にやりともないそれは此の身も同じ事、身一つ捨てると思ふたら皆胸にこめてゐる……大坂の浜に立つてもこな様一人養うて、男に憂き目かけまいもの氣を鎮めて下さんせ」と言つたのは、小女郎と同じ積極性をさへもつといえよう。

かような恋愛に陥つた遊女は、もはや「勤を大事」に思つたり、多勢の男の弄び物となる事に堪え難くなり、且つは男性の独占欲とか周囲の拘束力等も働きかけ、うまく行けば身請け、反対ならば心中という事になつたと思われる。遊女を扱つたものは他にもあるが、みな心の清い女性ばかりで、よそに心をうつす事もなく、一人の男性に心中立てをしている。そのためにこそ今日でも其感と呼ぶと思われるのであるが。

主人公達は以上見て来た遊女の外に、これと相愛の仲にある奉公人や若主人など、及びそういう男性と関わりを持つ娘や女房など、種々の境遇にわたつて描かれているが、みな遊女に負けず劣らぬ純愛の持主であり、近松はその何れにも力を注ぎ愛情を傾けている。それはこの家族制度の確立した時に、親の定めた縁組に對して、「子は親次第のものなれど、縁の道ばかりは押付け業にはならぬ事」と勇敢にたてつくおまん（薩摩歌）や、同じく親に

反抗する嘉平次（生玉心中）を、憚るところなく描いているところにもよみとられると思う。

坪内逍遙は、近松を研究するには、「先づ時代物よりも世話物を扱ひ、世話物にても、女主人公の狭斜以外なると、事件の構成に別趣あることを先にして、途を功多く労少なきものに取れり」（『近松之研究』）として、「檜の権三重帷子・堀川波の鼓・恋八卦柱簪」を手始めに、それから時代物に入り、そして世話物に復ることを注意しておられるが、ここ三篇は姦通物という一群に属し、しかも特権階級を扱つたもの故、世話物中でも特異な存在で、近松に描かれた恋愛をみるのに適當でないから、右の方法をそのまま受け入れるわけにはいかない。それどころか、恋愛相はそれら特権階級とは正反對の立場におかれた遊女に、最もよく現れているようである。すなわち世間から人格を認められる事なく売物買物とみられていた遊女、「傾城に誠なし」とか「遊女は人をだますもの」というのが定説になつていた遊女をこそ、近松は最も多くとり上げて一般の女性よりむしろいさ／＼と描き出しているが、それは恋愛を通して「遊女のみこと」という一見逆説的な点を強調しようとしていたように思われるのである。

彼は、身分や家柄等という、人間をはかる尺度となる外部的なもの一切を除去したあとに見出されるもの——魂の問題——にこ

その価値を認めていたらしく、その魂により結びついた男女の仲、すなわち恋愛を到る処でうたい上げているが、それは阿部次郎氏（徳川時代の芸術と社会）のいわれる通り、わけ知りの戯れにくらべて素人趣味であろう。しかしそういう恋のあり得る事を信じた彼は真剣でひたむきな遊女の恋を描き、且つ阿部氏のいわれる特愛思想の一つの現れを諸所に述べているのである。

恋愛にも様々あるが、脇目もふらぬ真剣な恋愛、それが真実であればあるほどその目的は「遂には未で女夫になる大願ではないかいの」とおさが（生玉心中）がいうところに置かれる筈で、なおそれがいかなる障碍にあつても摔けぬところに純化されて行くのであるが、彼の描いた恋愛にはその一歩おすところがなく、しかも一度思いこんだ心の誠は死を以て貫こうとする恋の強さの故に悲劇が多くなつたのである。しかし彼は、これら正式な結婚を許されなかつた主人公達をも、心底から結合し魂のゆきかいがみられるが故に、「めおと」として扱っているもので、「いとしや私故種々にお身を狂はする、詮議の時は皆私が業にして身を運れて下さんせ、ハテ罪にあふとも逃るゝとも、分け隔てはないわいの、ほんにさうぢや女夫ぢやもの」と自認するお花と半七（長町女腹切）や、死なねばならぬ破目となり一旦出見世に落着いて、さかに向かい、「ふたりかう並べば夫婦住ひし同然なり、是爰が

そなたの内ぢやぞや」と言いしかす嘉平次（生玉心中）等々、かかる敘述は枚挙に遑無いほどである。また前に引用した博多小女郎や夕霧は、女ながら積極的にそれを口にしたものであつた。ところで妻子ある徳兵衛（重井筒）や治兵衛（天の網島）はどうかというに、徳兵衛が二人で死のうと言え、（お房）「ナウさう思ふてが定かいの」（徳兵衛）「思ふが不思議か女夫ぢやもの」と断言しているし、治兵衛も小春に向かい、「今度の今度のずんどこんどの先の世迄も女夫と契る此の二人、枕を並べ死ぬるに誰が譏る誰が妬む」「五生七生朽ちせぬ、夫婦の魂離れぬ印……」と言っている。そうして彼はこれらの結びつきを、「色で逢ひしは早や昔、今は真身の女夫合」（冥途の飛脚）とみていた事が知られる。しかしこれは素人にも勿論みられる事で、「夫婦も共に伏沈み」（心中万年草）、「夫婦は物も言ひたげに顔振上げしが」（五十年忌歌念仏）等々あるが、このようにどの作にも、そして地からも台詞からも、この思想がよみとられるのである。

人物のこのような無差別的取扱いは、ひいては四民平等の觀念にも及ぶべきもので、事実武士と町人の本質的平等という考えも方々にみられる。但しそれは殘念にも、階級制度の存続を疑問視せず、その中で平等を主張するという觀念的なものとどまり、社会構造の变革を要求するところ迄發展し得なかつたが。ところ

でかように本質的なものを把握していたと思われる彼にして、夫婦における女房の立場のなじめさにはふれていない。当時の女性に均しく覆いかぶさっていた、不幸な重圧に対する何らの発言をもきく事が出来ないのである。しかしこれは時代に責めを帰すべきかもしれない。とにかく家庭をまもる主婦と、男性を主人としてでなく一人の異性として接する事に鍛錬された遊女との間に、一種の闘争が行われた事は、何といつても女性の不幸であつた。

#### 四

本能の支持を受けている恋愛、それも「徳様に離れて片時も生きてゐよふか」というお初や、「こなさんに添はれねば生きてゐる小女郎ぢやない」という博多小女郎、「山はあれども、崩れても久米様に逢へば嬉しい〜」というお梅のような、恋は盲目の代表と言えそうな人物もあり、「たとへ平様が盗人で有らうが強盗で有らうが、いとして〜命をやつた此のさがぢや」というおさが。これに対する男性も「そなたをのけてこの世界に女子が有ると思ふにこそ、綿をつまうが機織らうが、おきはは愚か中将姫の再誕が、蓮の糸で一重羽織おりやるとて、見向きもする平でない」と言い切る嘉平次に代表されよう。かように燃え上つた仲の二人に、様々の力が障碍となつて働きかける時、到底そのまま

で添いとげる事は出来ず、「是程思ひ合つた仲、なぜに女夫になられぬ」というお夏の歎きは、これら男女のすべてに通じるものであつたろう。恋愛の二人が一応の打開策（それも部分的・一時的にとどまるものが多かったが）を講じ、それすら崩れ去つてしまつた時、固く心の結ばれた男女をまつものは、心中もしくはそれに近い破局であつた。彼等の恋愛はこのような面において、積極性を示すよりかはなかつたのである。ところで愛し合つてゐるのに生きて行かれず、長かるべき将来をよそに命を捨てる、それも自らの手というのは悲劇の最たるもののように思われるが、近松の筆になる心中に陰惨悲痛なところはなく、むしろ明るさをさえ感じさせられるのである。

その「恋愛」とか「死」とかは、一般に文学を生む大きな動機となるものであるが、これらは本来併立しない筈である。すなわち恋愛は人生における一つの、そしてある場合には無上のよろこびであるのに対し、死はいう迄もなく人生の終局であるから。しかるに近松流の心中は、この世で恋愛を貫く事ができないため、死によつて永遠の世界でそれを成就しようとしたのであつた。そこで「心中」についてであるが、先ずその意味は、元來「心中」の義であつたのが次第に種々転用され、自分の信ずる人に真心を傾けつくす意味の「心中立て」から、遂にはその究極とし

ての「心中死」を、死という字を除いてもなお相愛の二人が共に死ぬ情死の意味に用いるのが通例となり、今日に及んでいるものようである。近松の用例をみるに、すべてが情死を現しているわけではないが、心中物という一群の作品を遺した人であるだけに、何といつてもこの意味に用いられているものが最も多いのは当然であろう。

そうして、我が国に於いては儒仏の二教が社会を律すること長く、仏教の説く来世観は死の恐怖を除去するよりどころとして、鎌倉時代以後の乱世に作用し、それが江戸時代に迄継続しているものであるが、同じ死ではあつても、支配階級から儒仏教に反するものとみられ、すべての欲望の中で最も罪深いものとされ、それだけに執心も強いと見做されていた愛欲の果ての死に、一蓮托生という幸福は望めなかつた筈である。ところが近松は「直に成仏得脱の誓ひの綱島心中」と述べているのでも知られるように、随所に一蓮托生を持ち出して、当事者達を死出の旅路へ急がせている。すなわち若い男女が、現世は束縛多く住みにくいとどこ故もつと自由な世界に生きたいと願うところを、仏教用語を借用して現したもので、あの世で添おうといつて死に赴く彼等は、歎きつつも「累の通り一所で死ぬるこの嬉しさ」と喜びをささ示しているのである。「明日は未来で添ふもの」と、気軽に旅に出かけ

る人でもみるような感じのする心中、そこに悲慘さを払うものがあり、このように放恣な創造に基くといえる自由な世界を望み死んで行つた彼等、またそれを「未来成仏疑ひなき恋の手本」と受け入れてたのしみ得た元祿の人々は、ある意味では幸福であつたといえよう。

しかし仔細に検討すると、主人公達は決して快く死んで行つた者ばかりではない。世間が認めていない恋愛を貫こうとしたために、世間的な不義理を重ねた事を歎き、現世の絆に縛々とし、その上累世の救済を覚束なく思いながら、死に赴いた者も多いのである。「手に手を取らんと思へどもまだ死んで死ぬ死出の旅、連れ立てうやら連れまいやら逢はうやら逢ふまいやら、再び生きて生顔を見るは此の世の限りか」(二枚絵草紙)と思うもあり、「思ふた事いふた事違へば違ふ現世さへ、未来は猶かし覚束なや、中有の旅の雲霧に見失ふ事ありとも、大死と思ふて下さるな、六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや、ッ、をんでもないこと、たとへ畜生界に落ち、虫けらに生るゝとも同じ虫と生れう」と迄思いつめる二郎兵衛おきさ(今宮心中)等をも描いている事により、彼等の抱く未来観は決して安楽世界のみではなく、従つて「厭離穢土・欣求淨土の念に驅られ、相携へて自滅する」(島村抱月「抱月全集」)と簡単に片付けてはしまえないのである。但し「能い所へよ

も往かじ水火の地獄も厭はねども夫妻別れて行かうかと是のみ猶も迷ひ」となるが、それにしても愛する者同志にとつて、拘束の多いこの世よりは、より自由なところとして腦裏に描かれていた事と思われる。

ところで心中の実状は「長町女腹切」で半七の叔母がいう通り、「世間多い心中も銀と不孝に名を流し、恋で死ぬるは一人もなかつた」のかもしれない。「心中は金中」であつたのかもしれない。それ故切端つまつて何事かを仕出かしても、「生きらるゝだけ此の世で添はう」（冥途の飛脚）というのが本意であつたように思われるが、近松は今日からみると全く馬鹿らしいような動機で心中させており、その死に陰惨さが感じられないのは、彼の筆により美化されているからである。すべてを捨ててかかり、公に認められていない情に奔つた主人公達を是認させるために、義理を持ち出し敵役に憎悪を集中させる等して、たとい悪事を犯し世の非難をあびるような事をした者でも、決して不徳義な人物ではないという事を強調し、公然と同感し得る人物を描こうとしたのだと思われるのである。

## 五

近松世話物の結末は悲慘なものが多いにも拘らず、全体として

の印象はむしろ明るいと言へる、すなわち甘美な悲哀といったようなものを味わうという事は、裏を返すと深刻でないという事を意味し、そこに物足りないという評も出てくるようである。

しかしこれは先ず、彼の作品が人形操芝居の詞章であり、興行の台本であつて個人としての自由がきかなかつた事、作者にかけられる期待と責任が大であり、またその重要な構成要素である観客層が当時の知識程度の低い階級であつたという事など大いに関係する。が、問題は何よりも彼自身にあつたと思われる。その作品や逸話から推測される温厚な人物と、それに自ら唱えた虚実皮膜論の実践によるものと思われるのである。

近松の芸術観のうかがわれる『難波土産』発端によれば、彼は「芸といふものは虚と実との皮膜の間にあるもの也……虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰が有るもの也……画そらごととて、其像を念がくにも又木にきざむにも、正真の形を似する内に又大まかなる所があるが、結句人の愛する種とはなる也、趣向も此ごとく、本の事に似る内に又大まかなる所あるが、結句芸になりて人の心のなぐさみとなる。文句のせりふなども此こゝろ入れに見るべき事おほし」と述べている事により、観客に「慰み」を与えようとしていた事が知られる。但しそれは単なるなぐさみにとどまるものではなく、時代の趨勢もあつて情

をこめるところに美を設定し、娯楽慰安を与えながらひいては観客を高めようと志していたもののようである。そしてそれには義理を持ち出すのが最も効果的であつた。そも／＼近松は病苦とか貧困とかいう、より痛切な悲劇となし得る題材と捉えていないが、それは彼が深刻さを好まなかつたからだといえるのではあるまいか。さればこそ時勢に即した義理をもつて来て、憂いを醸し出そうとしたのであらう。

この芸術観に立脚して、彼は人情の機微を穿つた。よく言われる義理人情の葛藤、それはそれ自身を悲劇の主動機とみなすのは当然ない事既述の通りであるが、彼はこの義理人情の交渉の密な世界において、愛情を見事にうつし得ているのである。この時代は情の解放により、そのうま酒を求める人々にみっていたのに、時の権威・道徳は恋愛を欲望とだけ見て、すべて愛欲は執念深いもの・醜いものとして、すべてを肉の恋として排斥したのであつた。しかし近松作中人物のそれは、肉の恋・官能の恋と貶すには、あまりにも清らかである。たとえその出発は何処であつたにせよ、それは既に肉の世界を通過して、魂のゆきかう恋、魂により結びついた清なる恋の域に迄高められているのである。そうして彼の取り上げ方には、遊女も素人の女もなければ主人も奉公人もない。あるものは只赤裸々な人間同志である。まさに平等の立

場を認められた男女の恋である。その中でも、社会的にみて悲しいうちでも悲しい身すぎとされていた遊女は、当時における社交界の女王といわれた太夫でさえ、実質はみじめなものであつたようであるからには、世話物の大部分を占める下級遊女の哀れさは想像に余ると思われるが、そこへ通う中下流の人々は、彼女等を対等の人間として愛してしまつたのであり、近松の筆の美化にもよろうが、彼女等もそれに値するように行動しているのである。

しかし大抵の事が金で解決する世となつた中で、最も金があるという廓は、武士が下女から「編笠押上げ面体吟味」されても文句を言えぬほど階級差がなく、誰でも平等に扱われる世界であつたが、本来は封建制度維持のために設けられたところであるから、彼女等の真実さはその廓の使命・設定の根本義を超えるものであつた。従つてそれらが早晩社会と衝突を来すものであつた事は、疑いをいれぬところである。なお事實は艶消しの、美しくない心中であつたかもしれないものが、彼の筆にかかると（その動機は敵役等外部的なものに置かれていたので、たとえ世界の奥行きが浅くなつておろうとも）まさしく恋に生き恋に死んだ心中となつていのである。

以上、あまりにも狹斜に例をとりすぎたきらいがあるが、先に述べたように遊女にまことをみるという逆説的な試みの為で

あり、その余の男女の言動も負けず劣らずながら、最もいき／＼と清らかに描かれている遊女に、近松の意図がうかがわれるように思つたからである。

とにかく近松は、このように人生の諸相を描写する事によつて、人生の真を把握した。人々の魂の中に人情の美を見出して、純化し創造した。恋愛を本能的肉欲と見做す事なく、却つて最も美しい魂の輝きとみて、そこに人間として最も貴く不変なるもの「まこと」を発見し、それを観客に示す事により、彼等を啓発しようとした。ところがそれは単に観客にとどまらず、彼の筆の醸し出す快さを伴つて、社会の各層に滲透して行つたと想像されるのである。そこに当時の演劇の果した役割の大きさがあり、作者としての生き甲斐も感じられた事であろう。彼はわが身を高所において人々を教化する態度をとるよりは、自らも民衆と共に泣き且つ喜ぶ人であつたように思われるが、浄瑠璃作者としては、当時の文芸が目標としていた「なぐさみ」を与える事を心がけながらも、事実以上の真実をとらえている事により、娯楽と共に浄化し高める役目を果し、今日迄その生命を保ち得ていると思うのである。

「親もゆかしや夫も恋しや、父は子を呼ぶ夜の鶴我は夫呼ぶ野辺の雉子」——この二筋道に泣くお夏、かような人間として本来

統一されるべき感情の分裂、そして相剋を默視し得なかつた近松は、それを一つにしようと努力し人間らしさを求めて生きる人物を描いたが、それは自己のあり方を貫こうとする限り、封建制の壁に突き当たり悲劇の渦中にまきこまれざるを得なかつた。幕藩封建社会の進展は次第に人間性の解体に向かつたため、この時代において人間の存在であろうとすれば、悲劇に生きるより他はなかつたのである。従つてそれを描く近松の筆になる人物に優劣なく、そこには只近世社会の擬似進歩、人間性解体の趨勢に抵抗する庶民の姿がみられるのであつた。純情で生一本な主人公達、悲劇にまきこまれる事をも辞さぬ程のひたむきさをもっている。彼等は支配階級と結託してしまつた近世都市の人間とは全然別系統の、どちらかといえば野暮に属し、封建社会の矛盾を隠蔽する機関を巧みに利用する等という要領のよい事が出来ない、非近世的とさえいえる人間であるが、かような人物にしてはじめて、人間性解体の趨勢に対する抵抗となり得たのである。近松が各所に時代革新の萌しを思わせるような言葉を吐き、進んだ考えを述べているからといって、その片言隻句を捉えて過大な評価をする事は、憚まなければならないが、このようにして抵抗の相をうつしている点には、注意すべきであらう。但し町人の活躍した上昇期においてさえこういう有様であつたからには、そこに二度と繰返



したくない時代の歪みが看取されるのである。

悲劇により抵抗が現れるという事、それが微かながら封建制に対する庶民の反抗であるという事を、支配階級が感じていたと思われる一つの例は、近松世話物の最終作「心中宵庚申」の出た享保七年、幕府が浄瑠璃の心中物を作る事並びにその上演を禁じ、また「男女申合相果候者之事」という御定書を公布し、心中者の死体や生き残つた者の始末に迄干渉する事により、実質的に心中を禁止したところにある。これは西欧で自殺を禁じているのとは事情が異り、何ら重大な根拠がない（と思われる）のに、世間心中が流行するからという理由で、それに関するすべてを差止めたというのは心中そのものについていえば、それが本来当事者達の身の処置にとどまり他に累を及ぼさぬものだけに、個人の最後の自由迄奪う事になる干渉として、行き過ぎとさえ思われるからである。又情死を表現するのに、「心中」という何かやわらか味と哀調の感じられる語を、一対一で刺違えでもするような、そして殺風景で凄じささえ感じられる「相對死」というよび方に改めたのも、そもそも心中という語にさえ、おそれをなした結果ともとれるのではあるまいか。

また浄瑠璃心中物に関しては、近松の作品が出てから世間心中がふえたとか、それに類似の風評に基き、心中を助長する根を

絶つという意味で、支配者が創作・上演を禁じたと考えられない事もないが当時既に多かつた心中がそのために多少増したとしても、阿部氏もいわれるように、当事者達が近松を知らなかつた心中者よりも喜んで死に赴いた、すなわち彼の麗筆に接する事により死後の世界に安らかな夢を描き、憧れをさえ抱いて現世に別れを告げたのであつたとすれば、当事者達とて幸福であつたろうし、いわんやその余の多くの人々が浄めうるおされたと想像されるからには、社会にとつてもマイナスどころか大いなるプラスとなつた筈である。従つて禁止の理由が一層薄弱となるので、結局はこれも浄瑠璃に表現されている反封建的なものをおそれたからだと思われるのである。この一見近松非難とみえるものは、逆に彼の芸術の威力を示す証拠となし得るように思われ、彼がなくさみを通して民衆に与えようとした美は、彼と民衆との交感により、彼等の心に力強く迫つて行きの確に受け取られた。そして人々はそのしみながら、その感情を高められて行つたと想像されるのである。

国文学史上、同じ封建社会でありながら中世に対する近世という時代区分を必要とするとすれば、それはひとえに元禄文学あつての事で、それ以前の文学的努力のすべてがここに集結し開花し

たからに他ならない。それも創造的文芸の絶頂を形造る元祿の三文豪あつての事である。そうして近松は、芭蕉や西鶴が歿した年配から世話浄瑠璃を書き始め、歿する迄成長を続けた作家で、晩年はないといつてよく、円熟時代を以て生涯を閉じたというべきであろう。なおそれらの傑作を数多發表した眞の活躍期は、西鶴のそれが経済的にみて向上期にある社会を背景としていたのと異り、時代としては下り坂にあり上昇する元祿町人の気概を失つていたが、彼の作品はそれをおもかげを保持している。すなわち元祿町人の延長をうつつして、一定の限界を乗り越える事はできなかったものの、力強くも亦華やかであつた元祿文学の最後を飾つてゐるのである。